「雅び」の崩壊と継承

春日の里に狩に行った折そこで高間見の妹たちを見た若者は狩衣の裾を切って歌を書き付けて遣ったというこ
とを語った後、筆者は、昔の人はこのように即座に「みやび」をしたものであると言う。

秋山虔氏は、この段について、『伊勢物語』のこうした挙げ、伝統によって趣向の守り育てられてきた歌の約
定に随従することによって、相手との心情の連帯を獲得するものであったことを言うでしょうと述べた上で、「みやび」について次のように述べておられる。

「昔人は、かくいちはやきみやびをなしめることは私見としては、とやめようとしていたが、それでもその伝統が強く残る。それは、すでに述べたような反俗の精神との関わりがあり、伝統の根拠は和歌にあり、そのことによる人間の連帯の確保、そこにはしたたかな反俗の精神との関わりがある。」

氏は「和歌の伝統」を基底において述べられているが、これは、王朝貴族社会において美的伝統は何といえども

和歌に由来するものであり、すべての美的伝統の根拠は和歌にあると言いかえるからである。したたかな反俗の精神との関わりがあるともは、決して一時の激情に流されるものではなく、むしろそれを「取り鎮める」行為、つまり冷静に行為されるものである。

そしてそれは伝統に基づいた美意識（貴族社会における美意識）でもあり、「反俗の精神」を持つもの、
つまり世俗の政治における権力構造とは線を画すものである。さらにその美意識は貴族社会の人々の「連帯」が
「確保」されるもの、換言すれば、人々の間に共感を得ているものである。

氏は、続いて「伊勢物語」について、次のように論じておられる。

「みやこ（宮処）ぶ」ことであり、宮廷風上品なるみ、風流事、風流なふるまいであると説明されるのが普通であるけれども、そうした語義の詮解によって本質が説明されうるものである。この初段の「をとこ」（中略）……業平はくっつ体制に忠実な良吏ではない。政治の世界に背を向け、歌人として生きるという側面において、真の意味での人間の回復を求めたのだといえよう。そこには、表面はともかく、現実の権威何ぞという貴重な矜持、それは現実には公的には何も作用性もないだけに、かえって自在でありうる。生活感情が、業平を、業平自身さえも関知することのない「をとこ」へと変貌させたのだといえよう。この「をとこ」は「古今集」の撰者、和歌を漢詩と同格にし、時代・社会の精神的基盤、あるいは主張に背反し、撰者らがおとしめ慨嘆した私的・民間的世界での在り様、そこにこそ人間の人間たるべき心
「雅び」の崩壊と継承

的連帯の実があることを証しようとしたのである。その旗手として、その人生を拓いた初段の初冠した「をとこ」

の、さまざまな情結を後続させた「伊勢物語」は、一に和歌がどこまでも眼目である点において、「みやび」

の文学と呼ぶにふさわしいのである。

岩波新日本古典文学大系『解説』三十一頁に引用の末尾の一文において「一に和歌がどこまでも眼目である点において」という点については、先述した

ように「和歌」を「美的伝統」とほぼ同義と理解すれば首肯できるのである。ここでも氏は反俗、つまり政治的世

界とは一線を画した、「現実の権勢何するものぞ」という貴種の矜持を誇りを持って「雅び」を固守したことに通ずるものである。また、「人間の人間たるべき心的連帯の実」は、王朝

貴族社会の人々の間に「雅び」が共通して保持されてきたことを語っている言葉であると言えよう。

このように、「伊勢物語」において登場した「雅び」は平安王朝貴族社会において、貴族の人々の精神の根底に深く保持され、さらには生活全般に亘って規定していったので

ある。

本稿は、この「雅び」が平安文学にどのように表われ、その後どのような展開を遂げたかについて考察するもの
みよし野のたのむの雁もひたふるに君がかたにぞまると鳴くなる
とある。人の国にても、猶かかることな念やまざりけり。

都を離れた地方においても「かえること」は在パンたというのである。「かえること」について足注では「女に
言いた歌をよみかわすような行為」とある。具体的に言えばそうだが、それだけのことではな
いこととはいうまでもない。前節で述べたように、当然ながらそれは、貴族階級の人々の美的伝統に基づく行為、すなわち「雅び」の崩壊と継承
「雅び」の崩壊と継承

一三四

内の国、高安の郡に、いきかよる所出でけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて、出しやりければ、おとこ、異心ありてかえるにやらると思ひうたがひて、前載の中にかくれて、河内へいぬしらがって、風吹けば沖つ白波たつ山夜半にや君がひとり越ゆら

とよいめるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれくかの高安に来てれば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づからいるかひ

幼騏楽が結ばれ幸せな日々を送っていたのも束の間で、経済的に不意にになったにつれ、実は他の女のところへ通う

よう化粧じる心の持ち様、さらには夫の身を案じるだけでなくそれを和歌に詠む行為、夫はこういったところ

に「雅び」とのうたを取つたからであるが、実はそれだけであるまい。夫が出かけて居ないにもかかわらず「い

て、筒子のうつわ物に盛る雅び」でないすがたが対照的に語られていることからもうなずけることである。

を佐日記」冒頭の一文であるが、紀賀之は仮名で日記を養るために、女文書と呼ばれた仮名で養ることを忍びずかにあった。
（西大園）

「おや、これが『女房』、ですか。」

「はい、これこそが『女房』です。ねねさんと呼ばれるのが一番ですね。」

「なるほど、それは覚えていましたが、そこまで詳しくは知りませんでした。」

「はい、ねねさんが一番です。」
「雅び」の崩壊と継承

これは「蜻蛉日記」の有名な一節であるが、今注目すべきは、夫兼家が浮気を知った作家が、夫が来訪した折に門を閉じて入れなかったという事柄ではない。そこまで頑な、当時の女性としては珍しいほどの彼女が、夫のことも菊に添えてあったということ、ここに注目するのである。まるで、自分が失った夫に対する怒りを率直にくつむけるのではなく、和歌で象徴して、しかも形式に則って花に添えて薔薇を飾るのである。これが、不倫のうちに王朝貴族社会という背景を前提にしてこの一節に接するため、作者の怒りがこのような形で夫に訴えられていることに何の違和感もなく受け入れがちである。つまり、「雅び」の枠の存在は、幹が失った夫に対する怒りを率直にぶつけるのではなく、和歌で象徴して、しかも形式に則って花に添えて薔薇を飾るのである。
四
そのように、彼らはどこ自然に「雅び」との枠の中で生きたのであるが、しかしそうして、「雅び」の枠を逸脱するも
のに対してもは容赦なく厳しい批判を浴びせる。その顕著な例は、次に引く「枕草子」の一節である。
（四二段）
げなき物、下衆の家に雪の降りたる。又、月光の光入れたるも、くちをし。
身分の賤しい者の家には、雪が降ることも月の光が差し込むことも「くちをし」いのである。
賤しい者は、それだけですでに「雅び」の枠の外に存在するのである。よってそのような賤しい者には、雪や月光を
賞でるような趣深い心などあるはずがない。よって、そのような趣味を解せぬ者の家に雪や月は「猫に小判」同
じく無駄であるのに、雪が降り月の光が差し込むとは「うえをし」い限りなのである。
このように王朝貴族社会の人々にとって「雅び」は、自分達の矜持を保ち、誇りを持ち続ける美意識の規範であっ
たのである。「雅び」の枠内にあるかどうか、この一点において、彼らは下賤の者と一線を画したのである。
ならば、「雅び」さえ保持すればそれで王朝貴族社会の人々と同等であったのかというと、そうではない。上述
の「枕草子」四二段も、身分が賤しいだけに「雅び」の枠外に追いやりられている。
先に引いた「伊勢物語」第一〇段において「人の国にても、猶かることなるようならざりけらる。」と語るのは、都
を離れた地方においても「かくること」つまり女に言い寄って歌をよいかわすような「雅び」の行為があったと
「雅び」の崩壊と継承
三七
『雅び』の崩壊と継承

こうしたことを単に語っているのではなく、そのことに驚いているということとは、都人ではなく鄙の者が『雅び』の行為はできないという前提があるからである。その裏には、都人しか『雅び』の行為はなしえない、鄙の者にすきもの、中納言、大納言、大臣などになり給は、むげにせくかたもなく、やむことならおぼえ給のこと、こよさまよ。ほどくにつけては、受領なども、みなさこそはあめれ。あまた国にいき、大武や四位三位など

女こそ入れらるけ。内たちに、御前母は内侍のすけ、三位などになりぬれば、をもくしれど、さりとてほどより過ぎ、なにばかりのことかはある。又おほやうはある。受領の北の方にて、国へ下るをこそ、よ

ロし人の幸のきはと思ひて、めでらやむぬ。ただ人の上達部の北の方になり、上達部の御むすめ、後に

同様に、官位官職が高いということもそれだけですばらしいものなのである。しかし、位というのは当時は生まれていての家柄が大きく作用していたのであり、この段で清少納言は出世することについて述べてはいるが、例

『枕草子』一七九段

舞いができようとも、それだけで『雅び』の枠内の者として評価されることは到底ありえないことだったのである。
このように、王朝貴族社会は『雅び』の枠が厳然としてあり、その枠を逸脱することとは人間的価値が低いものと
見做されたのであるが、このようにないれば価値観は、生活全般を支配していたといっても過言ではない。
宰相の君の……（中略）……いとおかしひに、ふくらかなる人の、顔いところまいか、にほをかしげなり。
大納言の君は、いとさやかに、小さしといふべきかたなる人の、白うつくしひに、つぶくと肥をたる
が、うべはいとそびやかに、髪、丈に三寸ばかりあまりたる裾つき、髪ざしかなど、すべて似るものなく、
さまにうつくしひ。顔もいとうらうくじく、もてなしなど、らうたげになよびかなり。
宣旨の君は、さい、やけ人の、いとほやかにそびえて、髪のすじこまやかにきよらにして、生ひさかりの末よ
り一尺ばかりあまり給へり。いと心恵けいしげに、さはもなくてなるさまし給へり。そのよりさしあゆみて
出でおはしたるも、わづらはすし心づかいせらる。心ひす。あてなる人はかうこそあるめと、心ひず、もの
ちたまへるも、おぼゆ。

女性の容貌や模様についての記述はいろいろな作品に多い。それは絵巻を見るまでもなく引き眉、鉤鼻、下膨れ
で髪は着物の裾に余るほどであるのが王朝美人であるが、どの記述も、それぞれの個体の好みを述べながらもこれ
雅びの崩壊と継承

一四〇

雅びは当時の女性の美しさに基準があり、それに外れることはすなわち「雅び」ではないという

とようである。

斎院に、中将の君といふ人侍るなりと聞き待。たよりありて、人のもとに書きかはしたりる文を、みそか人に
のとりて見せ待し。いところ醜に、われのみ世にはもののゆへ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人
は、心も肝もし苦やうに思いへ侍べか。見待しに、すなじ心やまし、おほけばらとか、よからぬ
人のいふやうに、にくこ思ふたまへらか。【歌ながらのあかしからは、わが院よりほかに、たれか見
知る給人のあらん。世におしかけ人の生い出では、わが院のかご御覽じ知るべき下を侍る。】

清少納言こそ、ったり顔にいみじう侍りけ人が、さばかりさかしきち、真名書きちして侍ほども、よく見
れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人にことならんと見かこめのめる人は、かならず見劣りし、行末いた
てのみ侍ば、醜になりぬる人は、いとすやうすぞろなるおもし、もののあればすうみ、をかしきも見ずく
さぬほどに、をのぞから、さらまるしくあだなるさまにもなるに侍べし。そのあだになりぬる人の果て、いかで
ちらかも、恵巧ぶる、思い上がっている人、他人より抜けに出ようとする人などが非難の対象になっているが、
逆に言えば、紫式部が宮仕えに上がった時、「一」という文字さえも知らないように振舞ったようなら、万事に控えめで大いなる才も隠さないような女性が美意識に通って良しとされたであろうであり、それに反するような教養を必要とすることがわかる。

【今昔集】において、女性の教養については、【枕草子】一〇段に語られている村上帝の代の宣耀殿の女御の話が見ある有名である。すなわち、宣耀殿の女御はまだ姫君の時、父である小一条の左大臣から巻詞をもらい、かくさせ給を御学問にさせ給へ、次には琴の御ことごであるが、よく戻る前には、御手をならび給へ、言い、女御になった後、帝の試問に見事答えたというのであるが、姫君の教養として「御手」「琴のこと」として【古今集】に必要とされることがわかる。

【蘭省宗氏錦帳下】に対して【草の庵をたれかけたけぬ】と付けた話（七八段、頭弁と孟嘗君の故事にまつわる）が降った日、中宮から【少納言よ、香炉峰の雪いかなる】と問われて即座に御箋を高く上げた話（二八〇段）で、雅びの崩壊と継承においていとまがない。このような話は【枕草子】に限ったことではない。他の作品にも頻繁に語られているが、
「雅び」の崩壊と継承

このように、女性の容貌、性格、教養についても一定の基準があり、この基準に適するものが美であり、それに外

れることは見苦しく非難されることである。

以上、平安王朝貴族社会の人々の規範もしくは基準というものについて、主として女性についてみてきた。男性
についてはどうであったかということであるが、男性として、一定の規範・基準は厳として存在した。花の一例を
挙げれば、受領が英をいっぱい持って上がってきた話など、そういう受領の姿は多く描かれている。《今昔物語集》
に於いても、谷底に落ち

りふりかまわずに富の蓄積に走る人々の姿は、貴族社会の人々から見える異端のこと、珍しいことであったからである。な

そのほか、男性についての規範・基準も間違いない存在したものであり、それを語るものも多くの作品に見ること

ができる。
すなわち、平安王朝社会には、一定の規範・基準があった。それは、美意識に基づく、華やか、品評の保持というべきものであり、それに外れることは下品なことになる。それは、教養があり、それに基づいた会話のやりとりができ、一挙手一投足に気品があり、しかも、これは努力でどうにかもならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王室と貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない。基準は彼らの生活全般に亘ていた